

第9回フェスピッククアランプール大会

2006年11月25日、南国マレーシア、クアランプールの空に、大音響とともに大輪の花火が華やかに咲き誇る。7日間にわたって開催される、第9回フェスピック大会の開会である。



しかし、その華やかさとは裏腹に、今回が最後のフェスピック大会となるせつない大会の幕開けでもあった。かつて選手として出場した大会で、しかも最後というそんな記念すべき大会に、日本選手団の役員として参加することができたことは感慨深い。

今回、日本からは、260名の大選手団を派遣した。その為、選手団は2団に分け、成田空港と関西空港からの分発となった。私が帯同した関西空港からのグループは、シンガポール経由で約9時間かけてクアランプールに到着した。直ぐにホテルに向かうはずが、迎いのバスが到着しておらず、空港で約3時間の足止めの後、出場競技毎に4箇所の宿泊ホテルへと向かうこととなった。いきなりのハプニングに、大会運営に不安が募る。翌朝からそれぞれの練習が開始されたが、やはり練習会場までの送迎バスは時間通りには運航されず、各競技団体も調整に苦戦した。開会式も長い待ち時間と長丁場の式典、それに加えてクアランプール独特の蒸し暑さが選手を苦しめた。が、とりあえず各競技が開始となった。



競技は、19の競技会場で実施された。陸上競技は、ナショナルスタジアム・ブキットジャリルで行われた。九州身体障害者陸上競技協会からは福岡県の山本浩之選手と洞ノ上浩太選手が、トラック及びマラソンに出場。トラック競技では、山本選手が800mで銀、5000mで銅。洞ノ上選手が10000mで銅と、各々メダルを獲得した。しかし、金、銀のほとんどは、タイの選手に独占されてしまった。また、記録的にも差があったことから、今後のパラリンピックを含めた国際大会に向けて、何らかの対策が必要と痛感した。ここに見られる差は、路上での練習が可能な日本選手の間で、抵抗が少なく高速な車いすマラソンがより好まれている



ため、選手たちは、マラソン型の駆動フォームや、軽い負荷に対応する基礎体力になってきているからではなかと推測できる。 今後、重たいトラックにも対応できるような身体作りなど、肉体改造やフォーム改善というトレーニングが必要ではないかと考察した。



今回、マラソンの部では、後続の選手を大きく引き離して、洞ノ上浩太選手が優勝、山本浩之選手が準優勝という結果だった。が、車いすの部の参加選手数は7名と少なく、アジアの諸外国のマラソンに対する関心度の低

さを露呈していた。このような状況では、今後のフェスピック大会（アジア大会）において、マラソンという競技種目が、姿を消してしまう可能性も否めない状況である。

今回の日本選手の成績は、金メダル29個、銀メダル33個、銅メダル38個。メダル獲得総数は、合計100個であった。